

教育学部生のアイデンティティ・スタイルとwell-beingの関連

西田 若葉*・沖林 洋平

The Relationship of Identity Style and Mental Health for Faculty of Education Students

NISHIDA Wakaba*, OKIBAYASHI Yohei

(Received August 6, 2012)

キーワード：アイデンティティ・スタイル、意思決定、精神的健康

1. 問題と目的

Erikson(1980 西平・中島訳 2010)によると、アイデンティティ(ego identity)とは、個人が子どもの頃から自分を認めてくれるモデルを模倣し成功して得てきた自尊感情が成長することで、「手ごたえをもって実感される集団の未来に向かって自我が確実に学んでいるという確信」へと変化した感覚とされる。すなわち、幼児期や児童期において他者への同一化を行ってきた個人が、他者にとっても自分自身にとっても受け入れられる自我あるいは自己を形成する感覚を持つようになるということである。Erikson (1980 西平訳 2010) は、アイデンティティの探究を青年期の重要な課題であるとし、それと対をなす状態をアイデンティティ拡散とした。

我が国におけるアイデンティティ研究は、Marcia (1966) のアイデンティティ・ステータス理論を導入した無藤 (1979) や加藤 (1983) の頃より盛んに行われてきた。特に、加藤 (1983) の同一性地位判定尺度を用いたアイデンティティの確立状態の類型化と、その類型による職業意識やキャリア形成等の比較は、大学生を対象とした先行研究がいくつか存在する。例えば、伊藤 (2002) は、教育学部の学生を対象に調査を行い、アイデンティティの「達成地位」の人物が自分のやりたい勉強があったという理由で大学へ進学したという学業意識を持つ傾向にあり、自己に対して深い洞察を行った経験を持つと推測している。また、達成地位に対し、圧倒的に人数が多かった拡散とモラトリアムの中間に位置する「D-M中間地位」の人物は、多くが就職や資格のために大学へ進学したという学業意識を持ち、約半数が職業を決定していない結果から、就職状況の厳しい中で自分の置かれた環境に疑問を感じて揺らいでいるという見解がなされた。しかし、ステータス・パラダイムに関しては批判的見解もみられる。谷(2001)は、Marcia(1976)の研究において「達成」から「モラトリアム」、「早期完了」といった未達成のステータスへの移行がみられたこと、有意差が全てのステータスの間にそれぞれみられなかったことから、各ステータスを弁別する妥当性を支持するには極めて不十分であることを指摘している。また、Waterman (1982) は、アイデンティティ・ステータスが全て「達成」に変化するわけではなく、別の未達成のステータスに変化する可能性があることを明示し、ステータスの縦断変化のパターンを分析している。ステータス理論は、アイデンティティの状態像を把握する指標として用いられてきたが、ステータスの変動しやすさや、我が国での類型化の妥当性に疑問が残る。そのため、アイデンティティ・ステータスの固定的で類型論的な観点による大学生の予測は、卒業後の進路に関してまで見通しを立てられるかどうかという問題点があると考えられる。

上述のようなErikson (1966 西平訳 2010) による青年の発達課題の記述とステータス理論の変動性の指摘を受けて、Berzonsky (1990) は、ステータス理論の展開を行った。Berzonsky (1990) は、青年が自己や人生に関する葛藤や問題に対して3種類の方略を用いると述べ、それらの志向をアイデンティティ・スタイルとして提唱した。3種類のスタイルとは、積極的に情報を集め、自分自身の葛藤や問題に向き合い解決しようとする情報スタイル、葛藤や問題から可能な限り回避しようとする拡散回避スタイル、家族などの重

*山口大学大学院教育学研究科

要な他者の価値観や信念をもとに意思決定を行う規範スタイルからなる。また、Berzonsky (1990) は、個人の全てのスタイルへの志向性と人生や自己に関する問題および葛藤の程度であるcommitmentを測定するIdentity Style Inventory (ISI)を開発している。さらに、Berzonsky & Neimeyer (1994) は、アイデンティティ・スタイルとMarcia (1966) のステータスパラダイムとの対応を検討した結果、情報スタイルは達成およびモラトリアムステータス、拡散回避スタイルは拡散ステータス、規範スタイルは早期完了ステータスに対応することを示唆し、Berzonsky (1988) が指摘したアイデンティティ・ステータスの差異が情報探索のスタイルの違いであることを実証的に検討した。

ISIを用いた研究は、大学生を対象に数多く行われており、各スタイルと心理変数との関連についてそれぞれ特徴的な結果が見出されている。例えば、Berzonsky, Cieciuch, Duriez, & Soenens (2011) は、様々な状況を越えた価値志向との関連を検討した。情報スタイルは、慈悲、普遍主義、自主性の価値志向とポジティブな関連を持つ一方、快楽主義、権力の価値志向とネガティブな関連を持つ。拡散回避志向は、快楽主義、権力とポジティブな相関を持つ一方、慈悲、普遍主義、自主性の価値志向とネガティブな関連を持つ。規範スタイルは、協調性、伝統性、保守性の価値志向とポジティブな関連を持つ一方、自主性、刺激、快楽主義、権力の価値志向とネガティブな関連を持つ。このような研究から、情報スタイルは個人の問題や自分自身と向き合う傾向にあり、拡散回避スタイルは自分の葛藤や問題を回避、先延ばしにしようとする傾向にあることから、情報スタイルと拡散回避スタイルは、その性質上対称的な関係にあると考えられる。規範スタイルについては、情報および拡散回避スタイルと多少異なる結果が見出されており、重要な他者への従属や保守的性などがみられる。

我が国では、新見・前田・加藤 (2005) によってISIの日本語版が開発され、その妥当性が検証されている。しかし、我が国におけるアイデンティティ・スタイルの研究は、新見・前田・越中・松田・淡野 (2007) や前田・新見 (2010) による青年のキャリア形成との関連に関する研究が行われているのみである。これらの研究では、大学生の情報スタイルとキャリア発達の基礎スキル全般 (人間関係形成、情報活用、将来設計、意思決定) がポジティブに関連し、拡散回避スタイルとキャリア発達の基礎スキル全般がネガティブに関連することが示されている。このことから、我が国の大学生のアイデンティティ・スタイルを把握することで、大学生が自分の学業や進路に関する問題に直面した際、どのように捉え、行動するかに関して、認知的な観点から実際の場面を通して検討できると考えられる。ただし、アイデンティティ・スタイルの研究はかなり少ないため、そのような検討を行う前に、我が国でのスタイル理論の導入に関して検討の余地が大きい。

本研究では、Berzonsky (2003) における大学生のアイデンティティ・スタイルとcommitment、well-beingの関連の研究を参考にし、教育学部生のアイデンティティ・スタイルを検討する。ハーディネスは、Kobasa (1979) によって提唱されたものであり、ストレスに曝されても健康を維持する性格特性とされる。すなわち、ストレスの影響を軽減できる性格特性であると捉えられている。人生の満足度についてBerzonsky (2003) では、アイデンティティ・スタイルとの関連の検討は行われていない。しかし、Berzonsky (2003) で用いられている目的変数は、well-beingそのものではなくwell-beingを成立させるような認知的側面が測定されていると考えられる。なぜなら、Diener & Seligman (2004) によるとwell-beingは、人生に関する肯定的な評価であり、幸福感や幸せ (happiness) といった概念の一部として研究が進められてきたからである。ハーディネスは、上述の通りストレスコーピングの側面を含む性格特性である。また、林・瀧本 (1991) によると、抑うつ反応の測定は、うつ状態の症状理解に役立つものであり、岡田 (2009) ではwell-being (幸福感) と共に心理的健康の指標として扱われ、大島 (2009) ではwell-beingと負の関連を持つことが示されている。そこで今回は、幸福感の基準として用いられてきた (大石, 2007) Diener, Larsen, & Griffin (1985) の人生の満足度尺度 (SWLS) をwell-beingの意識的な側面の基準として用いる。また、教育学部は、教員免許を取るか否か、どの種類の免許を取るか、卒業後、教師として働くか否かといった、大学卒業後の職業や人生に直接的に関わる意思決定が1年次から問われる学部であると考えられる。そのため、本研究では教育学部生の所属による比較検討も実施する。

2. 方法

調査対象者 Y大学教育学部生143名 (男性41名、女性102名) (平均年齢19.55歳、 $SD=1.06$) を調査対象者とした。

調査期間 2011年12月16日～12月22日に調査を実施した。

手続き 調査用紙を作成し、講義時間内に配布をおこなった。調査では、調査用紙に記入する個人情報の保護と成績への影響がないことの説明を行った上で、15分程度で回答を求めた。調査紙には以下の尺度を用いた。

2-1 アイデンティティ・スタイル尺度（新見ら，2007）

Berzonsky（1992）のIdentity Style Inventory（ISI3）の内、アイデンティティ・スタイルの志向得点の項目を翻訳し採用された全22項目を用いた。情報スタイル項目9項目、拡散回避スタイル項目8項目、規範志向スタイル項目5項目からなり、各スタイルへの志向性を測定する。各項目への回答は5件法（1「全く当てはまらない」～5「よく当てはまる」）で行った。

2-2 commitment尺度

日本語版アイデンティティ・スタイル尺度には、commitmentを測定する項目が採用されていない。そのため、本研究では、原語版のISI3（Berzonsky, 1992）におけるcommitment尺度10項目を用いた。commitment領域の10項目を筆者が邦訳し、アメリカの心理学部での1年間の留学経験を持つ心理学専攻の大学院生1名が、原文へのバックトランスレーションを行った。その際、日本語として読解が困難である項目の文章の訂正を行った。その後、心理学専攻の学部生3名に調査紙への回答を依頼し、項目の文章で意味の分からないものや読解が難しいものがないか確認を行った。項目への回答は1. と同様に5件法で実施した。

2-3 ハーディネス尺度

本研究では、多田・濱野（2003）によって作成されたハーディネス尺度15項目を用いて5件法で測定を行った。この尺度は、人生に起こりうる変化を成長の機会と捉える姿勢を表わすチャレンジ尺度5項目、自らがおかれた状況において何らかの影響を及ぼすことができるという信念を表わすコントロール尺度5項目、自らがおかれた状況に距離を置かず深く関与しようとする程度を表わすコミットメント尺度5項目の3つの下位尺度からなる。

2-4 人生の満足度尺度（SWLS）（Diener et al., 1985 大石訳、2007）

本研究では、SWLSの日本語版5項目を7件法（1「全く当てはまらない」～7「非常によくあてはまる」）で測定した。

2-5 抑うつ反応の測定尺度

本研究では、林・瀧本（1991）によってBeck Depression Inventory（1978年版）が邦訳されたベック抑うつ尺度21項目を用いて測定を行った。回答は、調査日より1週間前からの自分の状態について、1項目につき4つの文章から1つの文章を選ぶ形式である。抑うつ反応得点は、選んだ文章によって対応する得点（0～3点）を加算したものとした。

3. 結果

まず、各尺度において構造方程式モデリングを用いた確認的因子分析を行ったところ、アイデンティティ・スタイル尺度の内、情報スタイル尺度の1項目、規範スタイル尺度の2項目、commitment尺度の5項目は、それぞれの因子に対する標準化推定値が.30以下であったため、尺度から除外し、再び分析を行った（Table 1.）。それ以外の尺度に関しては、先行研究と同様の因子構造がみられた。尺度得点は、それぞれの合計得点を項目数で割ったものとし、その得点を分析に使用した。SWLSおよび抑うつ反応尺度については、得点の算出後に5件法への換算を行い分析に用いた。

本研究では、Y大学教育学部における教育課程の構成をもとに、調査対象者を教科教員養成系（以下、教科系とする）28名、小学校教員養成系（以下、小学校系とする）27名、学部卒業までに教員免許を取ることが必須でないその他の養成系88名に分類して比較検討を行った。まず、各所属における尺度得点の記述統計量を算出した（Table 2.）。

Table 1. アイデンティティ・スタイル尺度およびcommitment尺度の確認的因子分析

アイデンティティ・スタイル尺度	情報	規範	拡散回避
人生で何をすべきかについて、真剣に考えることに多くの時間を費やしてきた。	.52		
誰かと議論するときには、相手の立場にたって、その人の視点からも考えようとする。	.41		
自分の納得のいく価値観をもつために、人と討論したり、多くの時間を費やしてきた。	.75		
個人的な問題が生じたとき、理解を深めるために、その状況を細かく検討しようとする。	.34		
何か問題がある時、専門家(教師、医師、弁護士など)に意見を求めることはいいことだと思う。	.48		
自分にとって大事な問題に取り組むことは、しばしば自分にとって重要なきっかけになると思う。	.59		
何か決断しなければならないとき、いくつかの選択肢について時間をかけてよく考えたいと思う。	.54		
大事な決断をするときには、その前にできるだけ多くの情報を集めておきたいと思う。	.46		
新しい考えを取り入れるよりも、ゆるぎない信念をもっている方がよいと思う。		.46	
いろいろな価値について悩むよりも、決まった価値観をもっていた方がよいと思う。		.57	
一度よい問題解決方法を見つけたら、その方法を繰り返して使っていく方がよいと思う。		.33	
自分にとって大事な問題であっても、たいてい何とかかなと思ってほうっておく。			.57
自分の将来について今は真剣に考えない。それはずっと先の話だと思う。			.50
何か決断をしなければならないときでも、何かが起こるまで決断を延期しようとする。			.53
人生についてあまり深刻に考えない方がよいと思う。人生は楽しむものだ。			.45
私は、様々な問題について考えたり、関わったりすることをできるだけしないようにしている。			.47
自分の事を自分で考え、自分で対処することを求められる状況を避けようとする。			.56
これから起こると思われる問題について考えてもしかたがない。物事はなるようにしかならないと思うからだ。			.53
ある状況で自分にストレスがかかりそうだと感じると、それを避けようとする。			.40

commitment尺度	
自分の将来においてやりたいことを分かっている。	.85
自分がどんな価値を持っているのか分からない。	.34
自分が将来何をしたいのか確信していない。	.87
私は、何を専攻すべきか(または転科すべきか)確信していない。	.54
自分が個人的な決断を行うための確かな価値を持っている。	.32

(GFI=. 865, AGFI=. 836, RMSEA=. 067)

Table 2. 各所属の尺度得点の平均値(SD)

所属 \ 尺度	情報志向	規範志向	拡散回避志向	commitment	ハーディネス合計
教科系	3.91 (0.43)	3.01 (0.63)	2.69 (0.61)	3.50 (0.77)	3.81 (0.50)
小学校系	3.70 (0.57)	2.93 (0.69)	2.60 (0.57)	3.47 (0.79)	3.68 (0.63)
その他	3.79 (0.45)	3.04 (0.56)	2.75 (0.57)	3.19 (0.74)	3.68 (0.61)
全体	3.20 (1.13)	3.33 (1.30)	3.19 (1.20)	3.34 (1.39)	3.25 (1.23)

所属 \ 尺度	チャレンジ	コントロール	コミットメント	人生の満足度	抑うつ反応
教科系	4.20 (0.67)	3.34 (0.66)	3.88 (0.70)	3.81 (1.36)	0.59 (0.49)
小学校系	4.10 (0.62)	3.35 (0.73)	3.59 (0.84)	4.34 (1.27)	0.46 (0.32)
その他	4.11 (0.45)	3.27 (0.78)	3.66 (0.83)	4.11 (1.05)	0.52 (0.36)
全体	3.02 (1.13)	3.26 (1.28)	3.16 (1.21)	3.18 (1.16)	0.52 (0.39)

次に、アイデンティティ・スタイル得点とcommitment、精神的健康の各指標の関連を検討するために、各尺度得点の相関係数を算出した(Table 3. ~Table 6.)。

さらに、教科系、小学校系、非養成系による尺度得点の比較を行うために、分散分析を実施した。アイデンティティ・スタイルの志向得点を比較するために、3 (所属)×3 (スタイル志向得点) の2要因分散分析を行った結果、スタイル志向得点の主効果のみが有意であった ($F(2, 280)=101.56, p<.001$)。多重比較を行ったところ、情報得点が規範得点および拡散回避得点より有意に高く ($t(2)=11.50, p<.001$) ($t(3)=15.97, p<.001$)、規範志向得点が拡散回避志向得点より有意に高かった ($t(2)=4.472, p<.001$)。commitment得点を比較するために、1要因分散分析を行った結果、所属による有意な差異はみられなかった ($F(2, 140)=2.53, p=n.s.$)。ハーディネスの下位尺度得点を比較するために3 (所属)×3 (ハーディネスの3因子) の2要因分散分析を行った結果、ハーディネスの3因子の主効果のみが有意であった ($F(2, 280)=58.22, p<.001$)。多重比較を行ったところ、チャレンジ得点はコミットメント得点およびコントロール得点より有意に高く ($t(2)=6.54, p<.001$) ($t(3)=12.47, p<.001$)、コミットメント得点は、コントロール得点より有意に高かった ($t(2)=5.93, p<.001$)。ハーディネス得点を比較するために、1要因分散分析を行ったところ、所属による有意な差異はみられなかった ($F(2, 140)=0.50, p=n.s.$)。人生の満足度得点を比較するために、1要因分散分析を行った結果、所属による有意な差異はみられなかった ($F(2, 140)=1.44, p=n.s.$)。抑うつ反応得点を比較するために、1要因分散分析を行った結果、所属による有意な差異はみられなかった ($F(2, 140)=0.78, p=n.s.$)。

Table 3. 教科教員養成系における各尺度得点の相関係数

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.
1. 情報									
2. 規範	.00								
3. 拡散回避	-.31	-.12							
4. commitment	.40 *	.27	-.41 *						
5. チャレンジ	.41 *	.36	-.39 *	.23					
6. コントロール	.18	.61 **	-.16	.34	.38 *				
7. コミットメント	.20	.12	-.33	.48 **	.45 *	.20			
8. ハーディネス	.36	.48 *	-.39 *	.47 *	.81 **	.69 **	.74 **		
9. 人生の満足度	-.09	.25	.11	.19	.20	.47 *	.06	.32	
10. 抑うつ反応	.34	-.19	-.24	-.18	.25	-.25	-.09	-.04	-.41 *

(** : $p<.01$, * : $p<.05$)

Table 4. 小学校教員養成系における各尺度得点の相関係数

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.
1. 情報									
2. 規範	.24								
3. 拡散回避	-.76 **	-.28							
4. commitment	.32	.48 *	-.40 *						
5. チャレンジ	.67 **	.08	-.45 *	.44 *					
6. コントロール	.39 *	.45 *	-.29	.49 **	.57 **				
7. コミットメント	.55 **	.28	-.52 **	.70 **	.64 **	.61 **			
8. ハーディネス	.62 **	.32	-.49 **	.65 **	.84 **	.85 **	.89 **		
9. 人生の満足度	.58 **	.34	-.39 *	.63 **	.57 **	.62 **	.78 **	.77 **	
10. 抑うつ反応	-.10	-.30	.14	-.62 **	-.28	-.38	-.59 **	-.50 **	-.65 **

(** : $p<.01$, * : $p<.05$)

Table 5. その他の養成系における各尺度得点の相関係数

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.
1. 情報									
2. 規範	.11								
3. 拡散回避	-.45 **	.03							
4. commitment	.41 **	.15	-.41 **						
5. チャレンジ	.06	.04	.07	.18					
6. コントロール	.18	.23 *	-.08	.46 **	.36 **				
7. コミットメント	.42 **	.10	-.30 **	.62 **	.45 **	.50 **			
8. ハーディネス	.29 **	.16	-.14	.55 **	.74 **	.79 **	.84 **		
9. 人生の満足度	.10	.20	-.04	.35 **	.29 **	.50 **	.46 **	.53 **	
10. 抑うつ反応	.01	-.15	-.03	-.24 *	-.22 *	-.45 **	-.32 **	-.42 **	-.46 **

(**: $p < .01$, *: $p < .05$)

4. 考察

本研究は、教育学部生のアイデンティティ・スタイルとwell-beingの関連を検討することと、学生の進路に関わる所属によって関連を比較することが目的であった。

4-1 各所属による相関係数の比較

まず、アイデンティティ・スタイルとwell-beingの関連の比較検討を行う。教育学部生に共通するアイデンティティ・スタイルの関連は、規範スタイル志向がハーディネスにおけるコントロールとポジティブな相関をもつことと、アイデンティティに関するcommitmentが全体的なハーディネスとポジティブな相関を持ち、拡散回避志向とネガティブな相関を持つことが挙げられる。前者は、規範スタイルが先行研究において物事に対する保守性や伝統性といった価値観と関連していることが示されており、本研究で用いた規範スタイル尺度の項目内容が固定的な観念を持っていたことから、我が国における規範スタイルは、その志向性が高いほど自分自身の環境を統制できるという信念が高い傾向にあると考えられる。後者は、自己や人生に関する問題、すなわちアイデンティティに関する関与の程度が高いほどストレスコーピング能力が高い傾向にあると考えられる。また、後者の結果から、人生や自己の問題に対して回避的方略を用いようとしやすいほど、人生や自己への関与の程度が低いことも考えられる。このような共通点が教育学部の学生に存在することが推測されるが、学生自身の進路に関わると考えられる各種の養成課程の枠組みは、所属によって特徴のあるアイデンティティ形成やwell-beingのあり方を規定しうると考えられる。

まず、教科系の学生は、自ら情報を集めて問題と向き合おうとする方略への志向性が高いほど、自身の人生への関与の程度および困難を自らの挑戦する事柄として受け止める意識を高く持つ傾向にあると考えられる。また、安定的な価値観や方法を用いようとする方略が自分の置かれた状況に対して統制が可能であるという意識を高く持つ傾向にあると考えられる。これらの結果から、教科系の学生は、情報スタイルあるいは規範スタイルを利用することによって、ハーディネスの一部を維持もしくは向上させることが推測される。なお、教科系の学生における拡散回避スタイルの利用は、人生への関与や、困難を挑戦として捉えるハーディネスの能力の一部を阻害すると考えられる。これは、教科教員養成のカリキュラムが志望の専門科目に特化したものであるためではないかと考えられる。教科教育を行う教員は、児童生徒に対し発達的な側面を鑑みながら、それぞれの教育科目における専門性を以て学習指導に当たることが推測されるため、そのための知識や実践を学び、教員免許の取得や採用試験の受験を予定として行う可能性の高い教科系の学生は、自己に関する安定的な観点による将来展望や意思決定を行うと考えられる。

次に、小学校系の学生は、情報スタイルやcommitmentがハーディネス全般や人生の満足度と高いポジティブな相関を持つことから、自己や人生に関わろうとすること、自ら情報を集めて自己の問題に向き合おうとする方略の利用がwell-beingを維持あるいは向上させることが推測される。教科系では情報スタイル志向

と規範スタイル志向においてそれぞれの関連性があったのに対し、小学校系は、情報スタイル志向が今回測定したwell-beingの指標の多くと相乗性があるとみられる。また、規範スタイルが教科系と同様にハーディネスを阻害させるだけでなく、人生の満足度が低下する傾向を示しているため、小学校系は、教科系以上に情報スタイルの利用が重要であると推測される。これは、教科教育を行う教員と比較して、小学校教員の学習指導が教科全般や学級経営を一手に担うことの多いという広範的な教育であるためではないかと推測する。小学校系の学生は、そのような自身の将来的な教師のあり方について学ぶ機会があるため、学生として日常において知識と実践どちらにおいても情報の収集を優先するというアイデンティティ・スタイルに留まらない認知的スキーマを保持している可能性があると考えられる。

最後に、その他の養成系の学生は、情報スタイル志向がcommitmentおよびハーディネスにおける環境に深くかかわろうとする意識のみとポジティブな関連を持つことから、情報を集め自己や人生の問題と向き合おうとする方略は、自己や人生への関与と関連すると考えられる。また、拡散回避スタイル志向は、アイデンティティ・スタイルおよびハーディネスにおけるcommitmentとのみネガティブな関連を持つことから、その他の養成系における自己や人生の問題に対する回避的な方略は、自己や人生への関与を低減させるのみであり、well-beingの指標に対して直接的な関連は持たないと考えられる。規範スタイル志向は、ハーディネスにおけるコントロールのみとポジティブに関連する。その他の養成系は、教員免許の取得を卒業の条件としておらず、免許の取得や教員採用試験という出来事を必ずしも経験せず、企業への就職活動や進学等、教員養成のカリキュラム以外の選択肢を持つ学生が相対的に多く存在すると考えられる。このような選択肢による職業や将来に関する意思決定は、教員になるという選択肢と比較して一定のカリキュラムや予定の達成では確定できない側面が多いと推測されるため、入学当初から教員免許を取得する目標を持つ学生と異なり、ストレスコーピングとしてのパーソナリティ特性や人生の満足度といった肯定的な特性と関連するほど自己にとって確固としたものではないと推測される。その他の養成系の学生にとって、アイデンティティ・スタイルを利用することは、自己や自分自身の人生に対して関わる程度を決定するものであり、well-beingはアイデンティティ以外の領域でより維持される可能性があると考えられる。

4-2 所属による尺度得点の比較

以上のように、教育学部において進路へつながる所属の違いから、アイデンティティ・スタイルとwell-beingに関して特徴的な記述や推測が可能であると考えられる。本研究では、所属による尺度得点の比較のために、分散分析を実施したが、教育学部内の異なる養成課程による有意な差はみられなかった。教育学部全体におけるアイデンティティ・スタイル得点間およびハーディネスの下位尺度得点間において有意な差異がみられた。この結果から、教育学部の全体的な傾向として、スタイル志向は情報、規範、拡散回避の順番で高く、ハーディネスの3因子はチャレンジ、コミットメント、コントロールの順番で高いことが挙げられる。すなわち、本研究で調査対象者となった教育学部生は、認知的方略として情報を収集する傾向にあり、ハーディネスにおいては自身が挑戦しようとする捉え方が優位であると考えられる。

5. 今後の課題

本研究では、教育学部生を対象として調査を行い、所属によるアイデンティティとwell-being、将来や職業に関する決定について言及することを試みたが、あくまでY大学教育学部という限られた地域性や、公開された情報およびカリキュラム等からの一方的な推測にすぎない。そのため、今後の研究では以下のような課題が挙げられる。まず、本研究における比較検討ではサンプル数の偏りがみられたため、より多くの教育学部生に対して調査を行うことと、各所属や専攻、学年、性別等の個人属性をより細かに把握することで教育学部内の大学生のアイデンティティや進路決定に関してより厳密な調査が行えると考えられる。また、それに関連して、個人の大学における属性だけではなく、本研究におけるアイデンティティやwell-beingの検討と同時に具体的な進路希望の調査を行うことで、大学生の将来展望や意思決定に関する実際の記述をもとに検討や考察を深めることができると考えられる。本研究ではあくまで現在の所属から教育学部生の想定する進路を捉えているにすぎないため、大学生本人の意思決定を検討する必要がある。今後は、大学生の将来に関する実際の取り組みや、自己や人生の問題や葛藤に対する認知的方略の機能を実証的観点から捉えることで、大学生のアイデンティティ・スタイルをさらに検討したい。

引用文献

- Berzonsky, M.D. (1990). Self construction across the life-span: A process view of identity development. In G. H. Neimeyer & R. A. Neimeyer (Ed.), *Advances in personal construct psychology*, 1, Greenwich, CT: JAI Press, pp.155-186.
- Berzonsky, M.D. (1992). Identity Style Inventory (ISI3) revised version. Unpublished manuscript.
- Berzonsky, M. D. (2003). Identity style and well-being: does commitment matter? *Identity: An International Journal of Theory and Research*, **3**, 131-142.
- Berzonsky, M.D. & Neimeyer, G.J. (1994) Ego identity status and identity processing orientation: The moderating role of commitment. *Journal of Research in Personality*, **28**, 425-435.
- Berzonsky, M. D., Cieciuch, J., Duriez, B., & Soenens, B. (2011). The how and what of identity formation: Associations between identity styles and value orientations. *Personality and Individual Differences*, **50**(2), 295-299.
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The Satisfaction With Life Scale. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 71-75.
- Erikson, E. H. (1980). *Identity and the Life Cycle*. New York: Norton.
(エリクソン, E.H. 西平直・中島由恵(訳) (2010). *アイデンティティとライフサイクル* 誠信書房)
- 林 潔・瀧本孝雄 (1991). Beck Depression Inventory(1978年版)の検討とDepressionとSelf-efficacyとの関連についての一考察 *白梅学園短期大学紀要*, **27**, 43-52.
- 伊藤敦美 (2002). 青年期の自己同一性に関する研究——職業選択と学業意識の視点から *現代社会文化研究* **25**, 231-247.
- 加藤 厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造 *教育心理学研究*, **31**, 20-30.
- Kobasa, S. C. (1979). Stressful life events, personality, and health: An inquiry into hardiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1-11.
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- 前田健一・新見直子(2010). 高校生と大学生のキャリア意識とアイデンティティ・スタイル *広島大学大学院教育学研究科紀要第三部(教育人間科学関連領域)*, **59**, 65-73.
- 無藤清子 (1979). 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 *教育心理学研究*, **27**(3), 178-187.
- 新見直子・前田健一・加藤佳子 (2005). 日本語版アイデンティティ・スタイル尺度の妥当性の検討 *広島大学大学院教育学研究科紀要第三部(教育人間科学関連領域)*, **54**, 275-280.
- 新見直子・前田健一・越中康治・松田由希子・淡野将太 (2007). 大学生のアイデンティティ・スタイルとキャリア発達の基礎スキル *広島大学大学院教育学研究科紀要第三部(教育人間科学関連領域)*, **56**, 253-261.
- 大石繁宏 (2009). *幸せを科学する—心理学からわかったこと* 新曜社
- 多田志麻子・濱野恵一 (2003). ハーディネス尺度の信頼性と妥当性の検討 *ノートルダム清心女子大学紀要. 生活経営学・児童学・食品栄養学編*, **27**(1), 56-62.